ポジティブ・ステレオタイプのもたらすネガティブな効果
―Siy & Cheryan（2016）の追試―

森永康子・船田紗緒里・小川 葵・野中りょう・矢吹 圭・董 星宇

Negative effects of positive stereotypes: Reconsidering the experiments by Siy and Cheryan (2016)

Yasuko Morinaga, Saori Funada, Aoi Ogawa, Ryo Nonaka, Kei Yabuki, and XingYu Dong

In study 1, based on the findings of Siy and Cheryan (2016), we investigated whether female targets who heard a positive stereotype of women would perceive the stereotype holder as a prejudiced person and whether two factors, a sense of depersonalization and belief of being negatively stereotyped, would mediate the process. In Study 2, we investigated the moderating effect of benevolent sexism on participant attitudes. Using a sample of female university students in Japan, we found that hearing a positive stereotype induced a sense of depersonalization as well as the perception of being a target of prejudice. However, we did not find any well-explained mediating or moderating effects. Further research should investigate the negative effects of positive stereotypes specifying the gender of a stereotype holder (i.e., a member of out-group or in-group) and measuring the perceived traits (e.g. warmth) of the stereotype holder.

キーワード：positive stereotypes, prejudice, depersonalization, negative stereotypes

問　題

偏見や差別に結びつくものとして，集団に対するネガティブ・ステレオタイプが取り上げられやすい。しかしながら，近年，ポジティブ・ステレオタイプのもたらすネガティブな効果が指摘されるようになった（Czopp, Kay, & Cheryan, 2015 参照）。例えば，アジア系女性が「アジア系は数学ができる」というポジティブ・ステレオタイプに接触することで，その後の数学の試験の成績が低下したり（Cheryan & Bodenhausen, 2000），女性に当てはまるとされるポジティブ・ステレオタイプに接触することで，男女格差を肯定するような態度が女性参加者の中で強くなったり（Jost & Kay, 2005）することが報告されている。また，ステレオタイプを向けられたターゲットが，ポジティブ・ステ

レオタイプを表出する人物をそれほど好意的に見なさないことも報告されている。例えば，女性に対して好意的性差別態度（Benevolent sexism; Glick & Fiske, 1996）を持っている男性は，そうした態度を持っていない男性に比べ，女性から好ましく評価されないこと（Kilianski & Rudman，1998）や，自分の所属する集団に関するポジティブ・ステレオタイプを表出したヨーロッパ系アメリカ人に対して，アフリカ系アメリカ人がネガティブな評価を行うこと（Czopp, 2008）などが示されている。

なぜポジティブ・ステレオタイプはターゲットから好意的に受け取られないのだろうか。Siy & Cheryan（2013; 2016）は，ポジティブ・ステレオタイプの表出が，そのステレオタイプを向けられた個人にとって，自分の所属する集団に対するネガティブなもの（negativity）の存在を示すシグナルになると主張した。それは，ポジティブ・ステレオタイプがそのターゲットに，独自性を持った個人ではなく集団の成員としてみられているという感覚つまり脱個人化の感覚（depersonalization）を生じさせるためであるという（Siy & Cheryan, 2013）。Siy & Cheryan（2016）は，この仮説について，女性やアジア系アメリカ人のポジティブ・ステレオタイプを用いて検討を行った。その結果，ポジティブ・ステレオタイプの表出がターゲットの脱個人化の感覚を媒介して，表出者がネガティブ・ステレオタイプ信念も持っていることを知覚させること，さらに，ポジティブ・ステレオタイプがネガティブ・ステレオタイプを喚起させることで，表出者が差別的であるという知覚を生じさせることを示した。

本研究では，この Siy & Cheryan（2016）の追試を行うことを目的とする。研究 1 では，女性をターゲットとし，ポジティブ・ステレオタイプの表出者を差別的と見なすかどうか，そして，そのプロセスに脱個人化の感覚やネガティブ・ステレオタイプの知覚が関わっているどうかについて検討する。

ポジティブ・ステレオタイプがターゲットに悪影響を与えることを先に述べたが，好意的性差別もそのターゲットである女性に悪影響を与えることが報告されている（e.g., Becker & Wright, 2011; 森永・坂田・古川・福留, 2017）。しかし，女性自身の持っている好意的性差別態度によって，その影響が異なることも報告されており，女性自身が同じような態度を持っている場合には，他者から受ける好意的性差別の影響を受けにくい（Moya, Glick, Expósito, De Lemus, & Hart, 2007）。このことから好意的性差別態度を強く持っている女性はそうでない女性に比べ，ポジティブ・ステレオタイプのターゲットとなっても表出者を差別的な人物と見なしにくいのではないだろうか。研究 2 では参加者の持っている好意的性差別態度のもたらす影響を検討する。

研　究　1

方　法

参加者　女子大学生 81 名[1]。SNS を利用して，第 2 著者から第 5 著者の知人に協力を求めた。

実験計画　ポジティブ・ステレオタイプの有無の 2 条件を参加者間で設定した。シナリオ固有の反応を防ぐために 2 つのシナリオを作成し，参加者にはいずれかのシナリオを提示した。

[1] 男性を対象にした実験も行ったが，本稿では女性を対象にした結果のみ報告する。

手続き　シナリオの提示や従属変数の測定はGoogle Form を利用し，すべてweb上で行った。画面上でシナリオを提示したあと，ネガティブ・ステレオタイプ知覚，脱個人化の感覚，差別知覚を測定し，最後にポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別の判断を求めた。シナリオのひとつは，大学構内を歩いている女性に対して，ボランティア活動への参加を呼びかけるチラシを配布している人がポジティブ・ステレオタイプを表出するというもの（以下，チラシ・シナリオ）であり，もうひとつは，女性が出席している大学の授業で教授がグループ活動のため学生をグループ分けし，その際に教授がポジティブ・ステレオタイプを表出するというもの（以下，グループ・シナリオ）である。参加者には登場人物の女性になったつもりでシナリオを読むように教示した。ポジティブ・ステレオタイプ有条件には，チラシ・シナリオで「女性は，人の世話が得意なので」，グループ・シナリオで「女性は協調性があるから」という発言が含まれていた。ポジティブ・ステレオタイプ無条件ではこれらの言葉がなかった（シナリオは付録A参照）。

質問項目　ネガティブ・ステレオタイプ知覚は，ポジティブ・ステレオタイプの表出者（チラシ配布者あるいは教授）が登場人物の女性（参加者）のことをどのように思っているかについて，女性のステレオタイプである「おせっかい」「意見のない」「依存的な」「弱々しい」の4項目によって測定した（沼崎・小野・高林・石井, 2006; $\alpha = .639$）[2]。また，ダミーとしてMHFスケール（伊藤, 1978）の人間性項目である「誠実な」「想像的な」「明るい」「健康的な」「幸せ」を用い，これらの項目をランダムに提示した。回答は5件法で求めた（1 = 全く思っていない，5 = とても思っている）。脱個人化の感覚は，Siy & Cheryan（2013）を参考に，「自分の性別だけで判断された気がした」「他の女性と一緒という気がした」「個性を無視されたような気がした」の 3 項目を作成した（$\alpha = .827$）。 差別の知覚は「チラシを配っている人／グループ分けをした教授は差別的な気がした」の1項目を作成した。以上の4項目の回答は5件法で求めた（1= 全く当てはまらない，5= とても当てはまる）。次に，ポジティブ・ステレオタイプを表出した人物の性別（1. 男性，2. 女性，3. わからない）を尋ねた。

結　果[3]

ネガティブ・ステレオタイプ知覚を測定する4項目，脱個人化の感覚を測定する3項目の平均値を算出し，それぞれポジティブ・ステレオタイプ得点，脱個人化得点とした。各変数についての条件ごとの記述統計をTable 1に示した。

シナリオの差異　シナリオによる差異を検討するために，性別判断以外の3つの従属変数のそれぞれについて， 2 （ポジティブ・ステレオタイプの有無）× 2（シナリオ）の分散分析を行ったところ，ネガティブ・ステレオタイプ得点において交互作用（$F(1,77) = 6.271$, $p = .014$, $\eta_p^2 = .075$），脱個人化得点と差別知覚得点においてシナリオの主効果（それぞれ，$F(1,77) = 8.855$, $p = .004$, $\eta_p^2 = .103$; $F(1,77) = 7.232$, $p = .009$, $\eta_p^2 = .086$）が有意であったため，シナリオごとに分析を行った。

---

[2] ポジティブ・ステレオタイプを測定する項目として，「おしゃべりな」も用いたが，信頼性係数を算出する過程で，想定していた方向と逆であることが示されたため，分析には用いなかった。
[3] 本研究の分析は，HAD16_0056（清水, 2016）を用いて行なった。

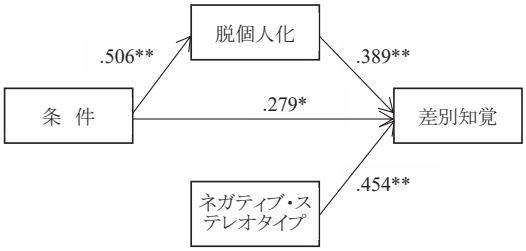

Figure 1a. 構造方程式モデリングによる分析結果（研究 1 チラシ・シナリオ）
注）条件は 0＝ ポジティブ・ステレオタイプ無，1＝ 有。飽和モデル。有意なパスのみ示した。** $p < .01$　* $p < .05$

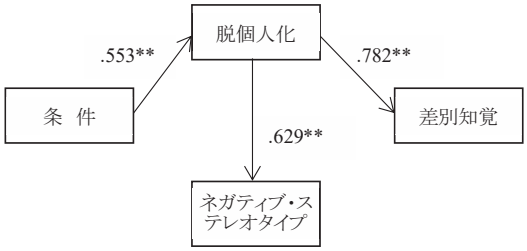

Figure 1b. 構造方程式モデリングによる分析結果（研究 1 グループ・シナリオ）
注）条件は 0＝ ポジティブ・ステレオタイプ無，1＝ 有。飽和モデル。有意なパスのみ示した。** $p < .01$

性別の知覚　チラシ・シナリオでは半数弱の参加者がポジティブ・ステレオタイプ表出者を女性と判断していたが，グループ・シナリオではほとんどの参加者がポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と判断していた（Table 1）。

ネガティブ・ステレオタイプ知覚　それぞれのシナリオについて，ポジティブ・ステレオタイプの有無による平均値の差の検定を行ったところ，チラシ・シナリオでは有意な差は見られなかった（$p = .540$, $d = .190$）が，グループ・シナリオではポジティブ・ステレオタイプ有条件の方が無条件よりもネガティブ・ステレオタイプが高く知覚されていた（$t(38) = 2.820$, $p = .008$, $d = .879$）。

脱個人化の感覚　それぞれのシナリオについて，ポジティブ・ステレオタイプの有無による平均値の差の検定を行ったところ，いずれのシナリオでも有意な差が見られ（チラシ・シナリオ $t(39) = 3.661$, $p = .001$, $d = 1.124$; グループ・シナリオ $t(38) = 4.089$, $p < .001$, $d = 1.274$），ポジティブ・ステレオタイプ有条件の方が無条件よりも脱個人化の感覚が高かった。

差別の知覚　それぞれのシナリオについて，ポジティブ・ステレオタイプの有無による平均値の差の検定を行ったところ，チラシ・シナリオでは有意な差（$t(39) = 2.918$, $p = .005$, $d = .915$），グル

Table 1
各変数の記述統計

	研 究 1				研 究 2	
	チラシ・シナリオ		グループ・シナリオ		グループ・シナリオ	
	ポジティブ・ステレオタイプ		ポジティブ・ステレオタイプ		ポジティブ・ステレオタイプ	
	有条件	無条件	有条件	無条件	有条件	無条件
	(n = 19)	(n = 22)	(n = 18)	(n = 22)	(n = 18)	(n = 17)
ネガティブ・	2.398	2.526	2.792	2.148	2.542	2.397
ステレオタイプ知覚	(0.653)	(0.676)	(0.884)	(0.549)	(0.632)	(0.650)
脱個人化の感覚	2.788	1.825	3.556	2.273	3.815	1.863
	(0.929)	(0.723)	(1.226)	(0.739)	(0.551)	(0.613)
差別知覚	2.909	1.737	3.389	2.682	3.944	1.706
	(1.411)	(1.046)	(1.335)	(0.894)	(0.873)	(0.849)
表出者の性別	45.5/45.5	21.1/42.1	100/0	86.4/9.1	55.6/27.8	64.7/11.8

注）( ) は標準偏差。表出者の性別は，/の左がポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と判断した参加者の割合であり，/の右が女性と判断した参加者の割合。わからないという回答を加えていないため，合計が100にならない。

ープ・シナリオでは有意な傾向（$t(38) = 1.999, p = .053, d = .623$）が見られ，ポジティブ・ステレオタイプ有条件の方が無条件よりも差別知覚が高かった。

構造方程式モデリングよるプロセスの分析[4]　Siy & Cheryan（2016）は，ポジティブ・ステレオタイプの有無が脱個人化の感覚を介してネガティブ・ステレオタイプ知覚を生じさせるという媒介過程と，ポジティブ・ステレオタイプの有無がネガティブ・ステレオタイプ知覚を介して差別知覚を生じさせるという媒介過程を 2 つに分けて，それぞれ分析し仮説を検討した。しかし，本研究では，構造方程式モデリングを用いて，ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件に比べ，脱個人化の感覚が高くなり，そのことでネガティブ・ステレオタイプが高く知覚され，最終的に差別の知覚が生じるという一連のプロセスについて検討を行った（Figure 1a, 1b）。その結果，両シナリオとも，ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件に比べ，脱個人化の感覚が高く，そのことで差別知覚が高まることが示された。しかし，脱個人化の感覚がネガティブ・ステレオタイプ知覚を生じさせるというプロセスは，グループ・シナリオにおいてのみ確認された。また，ネガティブ・ステレオタイプが差別知覚をもたらすというプロセスについては，チラシ・シナリオのみで確認された。

考　察

研究 1 は Siy & Cheryan（2016）の追試を行ったが，構造方程式モデリングによる分析では彼らの結果の再現はできなかった。しかしながら，2 つのシナリオともに，ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件よりも脱個人化の感覚が高く喚起されており，それが差別知覚につながっていることが示された。これは，ポジティブ・ステレオタイプのターゲットになることで，自分が個人としてではなく集団として見なされているという感覚が高まること，また，そのことで差別されているという知覚を生じさせることを示すものである。ポジティブ・ステレオタイプ表出者を差別的だと見なすのは，ポジティブ・ステレオタイプを持っている人はネガティブ・ステレオタイプも持っていると見なされるためだという Siy & Cheryan（2016）の主張は支持されなかったが，ポジティブ・ステレオタイプの表出者の評価が低くなるという点については，従来の研究（e.g, Czopp, 2008）と一致する結果であった。

研　究　2

目　的

ポジティブ・ステレオタイプのターゲットとなっても，ターゲット自身の持っている好意的性差別態度によって，相手を差別的と見なすかどうかは異なると思われる。研究 2 では，参加者の好意的性差別態度の調整効果を検討する。

方　法

[4] なお，Siy & Cheryan（2016）と同様の分析を行ったところ，グループ・シナリオでは彼らの結果と一致する方向での結果が得られた（付録 B 参照）。

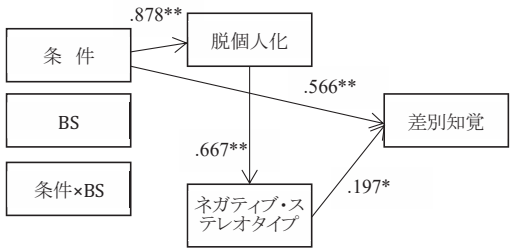

Figure 2a. 好意的性差別態度の調整効果の分析結果（研究 2 全参加者対象）
注）条件は 0＝ ポジティブ・ステレオタイプ無，1＝ 有。BS は好意的性差別態度。飽和モデル。有意なパスのみ示した。** $p < .01$ * $p < .05$

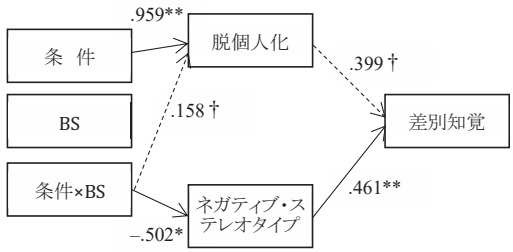

Figure 2b. 好意的性差別態度の調整効果の分析結果（研究 2 表出者を男性と判断した参加者対象）
注）条件は 0＝ ポジティブ・ステレオタイプ無，1＝ 有。BS は好意的性差別態度。飽和モデル。有意なパスのみ示した。** $p < .01$ * $p < .05$

参加者　女子大学生 35 名。ポジティブ・ステレオタイプ有条件は 18 名，無条件は 17 名。

手続き　実験は第一著者が担当する社会心理学の講義時間中に授業の一環として行った。シナリオの提示や従属変数の測定は Google Form を利用し，すべて web 上で行った。シナリオの提示後，研究 1 と同様の項目でネガティブ・ステレオタイプ（α = .546），脱個人化の感覚（α = .750），差別の知覚を尋ねた。その後，フィラー項目（5 項目）を挟んで，好意的性差別態度を測定した（「弱い立場の人々に対する思いやりは，男性よりも女性の方が優れている」など 8 項目（α = .750, 森永・坂田・北梶・大池・福留, 2018）。最後に発言者の性別を尋ねた。なお，研究 2 では，研究 1 で用いた 2 つのシナリオのうち，脱個人化の感覚とネガティブ・ステレオタイプ知覚にポジティブ・ステレオタイプの有無による有意な差が見られたグループ・シナリオのみを用いた。

結　果

平均値の比較　脱個人化得点（t (33) = 9.919, p < .001, d = 3.278）と差別知覚得点（t (33) = 7.686, p < .001, d = 2.540）にはポジティブ・ステレオタイプ有条件と無条件で有意な差が見られたが，ネガティブ・ステレオタイプ知覚得点には有意な差が見られなかった（p = .509 d = .221; 各変数の記述統計は Table 1）。また，好意的性差別得点には条件間で有意な差が見られなかった（ポジティブ・ステレオタイプ有条件 M = 2.396, SD = .594; 無条件 M = 2.243, SD = .667; p = .478, d = .237）。なお，ポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性だと判断した参加者は 5〜6 割であった。

好意的性差別態度の調整効果　ネガティブ・ステレオタイプ知覚に条件間で差異が見られなかったが, 好意的性差別態度の調整効果を構造方程式モデリングにより検討した (Figure 2a)。その結果，ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件よりも脱個人化の感覚が高く，それを介してネガティブ・ステレオタイプ知覚が高まり，さらに差別の知覚が高まったことが示された。これは，研究 1 の結果とは異なるものの，Siy & Cheryan（2016）の主張にほぼ沿った結果となった。しかしながら，参加者の持っている好意的性差別態度の効果は見られなかった。

そこで，補足的ではあるが，参加者の中で発言者を男性と知覚した者（21 名; ポジティブ・ステレオタイプ有条件 11 名，無条件 10 名）を対象に同様の分析を行った（Figure 2b）。その結果，ポジ

ティブ・ステレオタイプの有無と好意的性差別態度の交互作用項からネガティブ・ステレオタイプ知覚へのパスが有意であった。また，ネガティブ・ステレオタイプを高く知覚することによって差別知覚も喚起されていた。しかしながら，脱個人化の感覚からネガティブ・ステレオタイプへのパスは有意ではなかった。

ポジティブ・ステレオタイプ有無と好意的性差別の交互作用の下位検定を行うために，まず，ネガティブ・ステレオタイプ得点を従属変数，ポジティブ・ステレオタイプの有無と好意的性差別態度及びその交互作用を独立変数とした重回帰分析を行なった。有意な交互作用効果が得られた（$b = -1.130$, $z = -4.424$, $p < .001$）ため，単純傾斜検定を行なった。その結果，好意的性差別態度低群（−1SD）において，ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件よりもネガティブ・ステレオタイプを高く知覚していた（$b = 1.028$, $z = 3.880$, $p < .001$）が，好意的性差別態度高群（+1SD）においてはそうした効果が見られなかった（$b = -.142$, $z = -.969$, $p = .333$）。

考　察

研究 2 の目的は，参加者の持っている好意的性差別態度の調整効果を検討することであった。参加者全員を対象とした分析では調整効果は見られなかったが，構造方程式モデリングによる分析結果は，研究 1 とは異なり，ポジティブ・ステレオタイプが脱個人化を引き起こし，そのことでネガティブ・ステレオタイプ知覚が高まり，差別知覚へとつながるという Siy & Cheryan（2016）の主張にほぼ沿った形となった。

補足的にポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と判断した参加者のみを抽出し，好意的性差別態度の強さによるポジティブ・ステレオタイプの効果の差異について検討したところ，好意的性差別態度の弱い参加者はポジティブ・ステレオタイプのターゲットになると，その表出者がネガティブ・ステレオタイプも持っていると知覚し，そのことで差別的だと見なす傾向があることが示された。一方，好意的性差別態度の強い参加者においてはポジティブ・ステレオタイプ有無によるネガティブ・ステレオタイプ知覚に差異がなかった。これは，好意的性差別態度を強く持つ女性は，ポジティブ・ステレオタイプのターゲットになっても，表出者を差別的だと思わないという本研究の予測を支持する傾向にあると言えよう。

なお，研究 1 では，同じシナリオのポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別を参加者の 9 割以上が男性だと判断していたのに対して，研究 2 では 5〜6 割であった。これは，研究 2 を実施した講義の担当者（第一著者）が女性であったことによるものと考えられる。

総 合 考 察

本研究は，ポジティブ・ステレオタイプの表出によりターゲットから差別的だと知覚されるプロセスを検討した Siy & Cheryan（2016）の追試を行なった。研究 1 と 2 を通して，ポジティブ・ステレオタイプを表出した個人が，ターゲットとなった女性から差別的だと知覚されることは確かめられた。また，ポジティブ・ステレオタイプのターゲットになることによって脱個人化の感覚が生じることも確認された。しかしながら，ポジティブ・ステレオタイプを表出することがなぜ差別的と

見なされるのか，つまり，ポジティブ・ステレオタイプを持っている人はネガティブ・ステレオタイプも持っていると知覚されるために，差別的と見なされるというプロセス，さらに，ネガティブ・ステレオタイプの知覚は，個人ではなく集団として見なされるという脱個人化の感覚によって引き起こされるという一連のプロセスについては，Siy & Cheryan（2016）の主張を明確に確認することはできなかった。本研究の結果から示唆されるのは，ポジティブ・ステレオタイプを当てはめられることで差別されているという感覚が生じるのには複数のプロセスがあるという可能性であろう。例えば，本研究では，脱個人化の感覚が直接に差別知覚に結びつく場合とネガティブ・ステレオタイプを介して差別知覚が生じる場合が見られた。また，Hopkins-Doyle, Sutton, Douglas, & Calogero (2019)は，好意的な性差別行為が差別として知覚されにくいのは，行為者がターゲットである女性から温かい特性を持っていると知覚されるためであることを報告している。ポジティブ・ステレオタイプ表出が温かい特性を持った人物によると知覚されれば，差別的であると知覚されにくくなるであろう。今後，ポジティブ・ステレオタイプの効果を検討する際には，このような差別知覚を生起させにくくさせる要因についても考慮する必要があるだろう。

また，本研究では，ポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別をシナリオ中に明記していなかったため，参加者による性別判断を統制できなかった。例えば，グループ・シナリオは研究 1 と研究 2 で用いたが，ポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別判断が，両研究で異なっていた。また，研究 2 ではポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別によって好意的性差別態度の調整効果が異なる可能性が示唆されている。こうしたことから，今後はポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別つまり参加者にとって外集団に所属する人物かどうかによる差異についても考慮する必要があるだろう。

また，研究 2 では好意的差別態度の調整効果を検討したが，ポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と知覚した参加者のみにおいて調整効果が見られる傾向があった。過去の研究では，男性から好意的性差別態度を含む発言を聞いても，女性自身が好意的性差別態度を持っていると，好意的性差別の影響を受けにくいという結果が示されており（Moya et al., 2007），今後は，差別知覚に影響を与える参加者の個人差要因についても検討する必要があるだろう。

引用文献

Becker, J. C., & Wright, S. C. (2011). Yet another dark side of chivalry: Benevolent sexism undermines and hostile sexism motivates collective action for social change. *Journal of Personality and Social Psychology*, *101*(1), 62-77.

Cheryan, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). When positive stereotypes threaten intellectual performance: The psychological hazards of “model minority” status. *Psychological Science*, *11*(5), 399-402.

Czopp, A. M. (2008). When is a compliment not a compliment? Evaluating expressions of positive stereotypes. *Journal of Experimental Social Psychology*, *44*(2), 413-420.

Czopp, A. M., Kay, A. C., & Cheryan, S. (2015). Positive stereotypes are pervasive and powerful. *Perspectives on Psychological Science*, *10*(4), 451-463.

Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*(3), 491-512.

Hopkins-Doyle, A., Sutton, R. M., Douglas, K. M., & Calogero, R. M. (2019). Flattering to deceive: Why people misunderstand benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *116*(2), 167-192.

伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究　教育心理学研究, *26*(1), 1-11.

Kilianski, S. E., & Rudman, L. A. (1998). Wanting it both ways: Do women approve of benevolent sexism?. *Sex Roles*, *39*(5-6), 333-352.

森永康子・坂田桐子・古川善也・福留広大 (2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステレオタイプ　教育心理学研究, *65*(3), 375-387.

森永康子・坂田桐子・北梶陽子・大池真知子・福留広大　(2018). 好意的性差別尺度日本語短縮版の作成－働く女性にする好意的差別を考える－ 日本心理学会第 82 回大会

Moya, M., Glick, P., Expósito, F., De Lemus, S., & Hart, J. (2007). It's for your own good: Benevolent sexism and women's reactions to protectively justified restrictions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *33*(10), 1421-1434.

沼崎 誠・小野 滋・高林久美子・石井国雄 (2006). Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の予備的検討　首都大学東京・東京都立大学人文学報, *369*, 21-52.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.

Siy, J. O., & Cheryan, S. (2013). When compliments fail to flatter: American individualism and responses to positive stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, *104*(1), 87-102.

Siy, J. O., & Cheryan, S. (2016). Prejudice masquerading as praise: The negative echo of positive stereotypes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *42*(7), 941-954.

付 記

本論文は，2018 年度に広島大学教育学部で開講された心理学課題演習において，第 1 著者の指導により第 2 著者から第 6 著者が実施した研究をもとに執筆したものである。研究の一部は第 2 著者から第 5 著者により中国四国心理学会第 74 回大会学部生研究発表会において報告された。また，本研究は JSPS 科研費 JP18K03007 の助成を受けた。

付録 A

本研究で用いたシナリオ　（ポジティブ・ステレオタイプ無条件では，下線部を削除した）

チラシ・シナリオ:大学の中を歩いているところを想像してください。あなたが歩いていると、チラシを配っている人がいました。あなたが近くを通りかかると、その人はあなたの方を向いて、チラシを手渡しながら言いました。「子ども病院のボランティア活動に参加してくれる学生を募集しています。<u>女性は人の世話が得意なので</u>、あなたに是非参加してほしいです」。

グループ・シナリオ: 大学の授業でグループ活動をするために、少人数のグループに振り分けられるところを想像してください。教授がグループに振り分けた結果、あなたとあなたのグループのメンバーは全員、初対面でした。グループ編成を伝えた後に、教授があなたに言いました。「女性は協調性がありますから、初対面の人たちでも大丈夫でしょう」。

付録 B

研究 1 のグループ・シナリオについて，Siy & Cheryan（2016）と同様の媒介分析を行った結果。

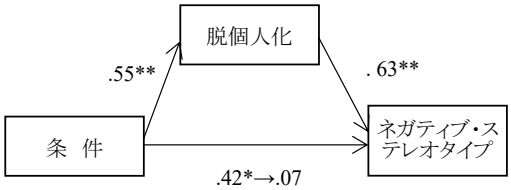

Figure 3a. 脱個人化の感覚の媒介効果（研究 1 グループ・シナリオ）
注）条件は 0 = ポジティブ・ステレオタイプ無，1 = 有。間接効果は Sobel $Z = 2.773$, $p = .006$, 95%CI = [0.20, 1.31]　** $p < .01$　* $p < .05$

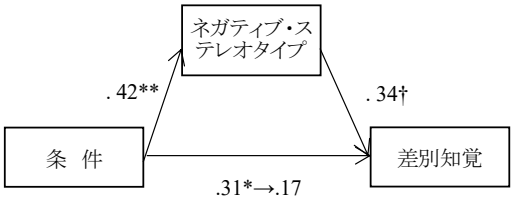

Figure 3b. ネガティブ・ステレオタイプの媒介効果（研究 1 グループ・シナリオ）
注）条件は 0 = ポジティブ・ステレオタイプ無，1 = 有。間接効果は Sobel $Z = 1.566$, $p = .117$, 90%CI = [0.02, 0.82]　** $p < .01$　* $p < .05$　† $p <..10$